キリスト教弁証論文学の成立について

石　原　　謙

キリスト教初代の古典的文学，就中新約聖書経典が，最近の様式史的研究の結果，もはや単純な文学的形式の著作ではなく，その中には種々の様式類型を示す部分から成立していることが明かにされたことは，今日改めて解説する必要もない位によく知られている。もちろん最初まだユダヤ的教養を背景として固有の教会的団体の形成されつつあった頃にはその文学的活動も，その端緒の開かれた限りにおいては極めて単純幼稚なものに留まっていたに違いないが，次第に異教的世界に宣教の範囲が拡大され種々の階層がその対象とされるに従って，その接触面も複雑に，文学的活動の性格も新しくなり，その作品も種々の様相を示し活潑になった。手紙の往復の頻繁になったのもその頃のことであり，しかもそれは当時の生活を反映して，単なる報道，挨拶，質疑応答，談論，説教，教訓等のみでなく，感情や意志の発露から教会的礼拝の片影を示す頌栄や祈りや儀式文も取り入れられることが屢々であり，次第に複雑多様になった。

この種の手紙はあらゆる種類の文学の萌芽を含み，独自の教訓書や，記録や，殊に主の言葉や行為を編集した福音書や説教や論説なども現われて来るのは必然である。その文学史的発展の過程は初代キリスト教文学史によって学ぶことができるが，その間においてわれわれが特に注意を引く一つの段階は，キリスト教弁証論文学（Apologetik）と呼ばれる様式の文学の成立したことである。それは確かに特異な一段階をなしている。何故ならそれ以前は何れの種類のものにせよ教会的雰囲気の枠の中で生れた文学

的活動であって，教会内の信仰生活なり教養や情緒を反映し，同信者自身の言葉と概念とをもって語り合う関係であったのに，この弁証論文学はその枠を破って教会外に出で外界の人々を対象とし，異教的文化思想信仰の世界と直面し，出来れば著者自身にも未知の言葉を用いて語りかける公けの場での談論であり，明かに他者を意識しての対話であるからである。従来とても異邦人への宣教ということは盛んに行われていたが，それは単に自己の信ずる福音を説く説教であり，未知の町に入って語るときにもし受け容れられなければ，足の塵を払って去ればよいのであった。しかし今はそうではなく，進んで未知の世界に入り異教的精神と文化とに接し，そこに根ざす異教徒と論弁しなければならない。そのときに弁証論が必要とされ弁証論文学が始まるのである。そこでこの種の文学には種々の新しい特質が成立する。たとい自己の信仰を説く福音の教は従来の場合と異らないにしても，新しい環境と情勢は在来の方法と様式との襲用を改めて現実の事態に即応せざるを得ないようにさせ，新しい論理と表現とを努力させるに違いない。その際に彼等説教者の学的素養と才智とが要求されるのである。

その際最も著しいことは説教者自身その置かれた立場と責任とを自覚して新しい人物となり，文学的個性を発揮することである。今はその師の教をただ繰り返して説教するのでなく，自己の確信するところを新しい言葉と論理とをもって表現し之を異教の人々に理解せしめなければならない。そこに真実の著作家としての独自の意義を獲得し，固有の任務を担う文学的個人となる。もはや使徒の名の下に隠れて伝来の教を繰り返す代弁者ではなく，小さな器であるにせよ自己の責任において自己の信念と才能とをもって異教的精神と対論しなければならない。それが弁証論へのモティーフなのである。

かくして弁証文学が成立したとは言うものの，直ちにその名に適わしい固有の様式を備えた文学作品が文学史を飾ることはむずかしい。最初は一

般の伝道説教や談話教訓などの中に弁証論的性格を帯びた語句が現われ，種々の機会に之が適用され，更に必要に応じて強調されて次第に文学的形態を整え得るに至るのである。突如としてではなく，長い年代を費やし，多くの説教者の口を通して固有の文学が形を成すのである。

弁証論文学がキリスト教文学史上の問題として展開されるに至った過程は，新約聖書[1]及びその後の文学の中に比較的に明確に跡づけることができる。もちろん最初から固有の弁証論文学的作品なり断章なりが見出されるというのではなく，初めはただその態度傾向乃至萌芽というべき章節が伝道説教などの中に微かに認められるというに留まっているに過ぎなかった。恐らくは著者自身も特に意識することなしにこの様式を適用したのであろうが，後に顧みてその態度の固有の意義を自覚させられるに至ったのであろう。使徒行伝におけるパウロの説教のあるもの――14章15―17及び特に17章22―31の如き――は之に属する好例である。之等の説教の記述された年代を今直ちに推定することは困難であるが，少くとも使徒行伝そのものの成立は第一世紀末頃と想定されるので，恐らくそれに先立って成立した文書中に散見する種々の用語や概念の中に弁証論的モティーフに基因すると認められるものがなくはない。殊に例えば当時の文書における教会概念の理解の中にこの種の態度が微かに看取される。ペテロ第一の手紙2章5に教会は神の「霊的な家」(οἶκος πνευματικός)とあるが，それは一方では教会が地上における固有の存在であると共に，他方では神に由来し神のものであり天上の国として特殊性を主張した表現である。この信仰は当時一般に存し，既にパウロはその「国籍（πολίτευμα）を天にもつ」ことを告白し（ピリピ人への手紙3章20），ヘブル書には「ここには永遠の都はなく，ただ来らんとするものを求める」と記している(13章14)。之等の観念の根柢には，キリスト者が地上では弱くあってもその力を天上に有し確乎たる信仰の立場を保っていることの自覚を表明しているので，そこに彼等の弁証論的動機を告白したものと認められる。もちろん之等の思想はま

だ潜在的意識として彼等の信仰の背後に存したに留まるが，使徒行伝中に記された説教は明かにユダヤ人かまたは異邦人かの前で語られた発言で，意識的に信仰の弁証を意図したものであり，特に注意を要する。その中でも代表的なのは第2章におけるペテロの説教と上述した第17章のパウロのアテネにおける説教とである。之については後述するところに譲りたい。

続いて新約以後の文学に『ペテロの説教』(Kerygma Petri)と呼ばれている著作の短い断片がクレメンスにより今日残存して，われわれの探究的関心をそそるに足るものをもっている。更に之に続いて120年代頃キリスト教徒がハドリアヌス帝の治下に迫害を受けたのに対し，クウドラートス(Quadratos)という「使徒の弟子」がキリスト教弁護の書を記して皇帝に捧呈したという記事がエウセビオスの『教会史』第4巻3章に伝えられ，且つその語の断片が引用されている。もちろんこの記事及び断片を確かめまた補充する他の資料がないために，それ以上に知ることはできないが，何等かの方法によってキリスト教の真理性と救主キリストの事実とを論証しようと努めたものであったことは推察するに難くない。

之等の断片の外にもいわゆる使徒後教父やその他の経典外文書の中に，弁証論的モティーフに基づく思想や概念が存したことは言うまでもない。之等教義史的研究によってある程度われわれにも接近し得るが，確実にその全部が弁証論文学の成立に役立ったとは認め難いかも知れない。それにしても之等種々の経験の積み重ねを経て，然る後に第2世紀後半の本格的な弁証論文学に進むのであり，その準備的な段階として殆ど一世紀に亘る期間の文学的活動を解することができる。以下に私は，最初期のキリスト教弁証論を探究しつつその典型的なテーマを学び，弁証論文学の歴史的意義を考えて見たい。

Ⅱ

まず第一に使徒行伝におけるパウロの説教，中でも特に17章22—31の[(2)]，

有名なアテネのアレオパゴス山上での演説に，異教哲学に対するキリスト教的弁証論様式の最初の範例を見ることができるが，之については拙稿「使徒行伝におけるパウロの説教」（青山学院大学基督教学会編『パウロ研究』松本卓夫教授古稀祝賀論文集）を参照されたい。筆者はそこに使徒行伝中に見出されるパウロの主要な説教を，その様式に従って四類型に類別し，その様式の相違と内容とを比較対照し，使徒行伝著者の意図乃至同書のモティーフを明かにしたいと考えた。そしてこのアレオパゴスの演説は，同書におけるパウロの対異教的対決を意味するもので，14章15—17の短い論述も内容上之と性格を同じくするが，余りにその容量の小さいために思想内容を取上げるのには適わしくなく，構造も明晰ではない故に，アレオパゴス説教の研究に主力を用いるのが望ましいことを注意した。今ここでは之を，同書2章14—36の使徒ペテロの長い典型的な伝道説教と比較して，使徒行伝における弁証論文学の研究に資したいと思う。

この両使徒の演説においてまず最初に注意される事情の相違は，一方がユダヤ人の伝統的な宗教に対するイエス信仰の弁疏であって，従ってユダヤ的環境を背景としているのに対し，他方は世界宣教者パウロが古典文化と哲学との都アテネのアレオパゴス山上にて試みた反異教的説教であるとのことである。ペテロの説教の中核をなす部分は2章22—24であり，そこにイエスが神より遣わされて世に来たり神の業をなそうとしたのにユダヤ人によって十字架に磔けられたが，しかし神は之を死者の中から甦らせたとの，歴史的事件，取りもなおさずキリストの福音の証しがこの説教の中心思想を形作っている。そして之を語るためにこの説教はまず現実の事態を弁明する序を述べ且つ預言者の引用によって読者の注意を求め（14—21），かくて22—24節の主題の後に，旧約聖書からの引用によって主題の論旨を確かめようとし，殊に詩篇の引照が繰返され強調されている（25—31，33—36）。その旧約的論証に続いて説教者自身も之と同じく一人の証人であることを告げ（32），終りに悔改めて救いにあずかるべきことの勧

めをもって説教を閉じている（38—39)。著者は，その問題がユダヤ人への福音の教であり，之を論証するのにユダヤ人の聖典である予言者及び詩人の証言に頼ろうとする。之は確かにユダヤ人の間にのみ通用する論理であり，之以外に恐らく方法は考えられなかったのであろうし，またこの演説の特質をなしている。

之に対して17章におけるパウロの説教は，もはやユダヤ人とその宗教とを前提としないで，古典的なギリシア文化都市アテネにおいて異教的精神を代表するギリシア人を対象とする論弁であり，むしろ異教的信仰と対決してキリスト教的信仰を弁証しようとする論争的演説である。この状況の下では旧約聖書からの引用は殆ど無意味である許りでなく，キリスト・イエスの意義とその復活の信仰も恐らく神話に過ぎないであろうし，神話としてはオリンポスの神々の系譜と余りにも関わりのない，しかもディオニュソス的な迫力も感じられない説話に留まるであろう。人々は之に何の魅力も興味も見出さないことは明かであった。そこで論者は之を避けてむしろギリシア人自身の神々に対する態度とその観念とを批判しつつ，彼等に取って「未知の神」（'Αγνώστος θεός）として意識される，言わば「他の神」の概念にキリスト教的な神信仰の内容を充たすことによって，その解明に進もうとした。もちろんその際論者の説く神概念の内容はキリスト教固有の信仰であるが，彼は之を説くのにギリシア哲学者の表現を借用し，詩人アラトスの語を引いてその印象を鮮明にしようとする。それは単に当時の通俗哲学者の教に頼る平板な知識に留まったかも知れない。それにしても彼の論述しようとしたのは，キリスト教の神信仰はギリシア人一般の理解を絶する真理としての神の信仰であり，その神があらゆる被造物の創造者であって万有を支配し，人間もその被造物として創造者を拝祀すべきのみであることを強調し，そこから実践的な悔改めの行いへの勧告を導き出そうとするに存したことは確かである。その意味にてこの演説は明かに異教的信仰と対決するための論争を意味し，しかももはやユダヤ的思惟方法をす

ててギリシア的発想に訴え，ギリシア哲学者の神話的信仰への抗議批判の方法をさえ用いようとしている。そこに論争者としての新しい姿勢が認められるのである。

この際パウロのこの演説が実際にどれ程有効であったかは全く問題外のことである。使徒行伝はストア学者やエピクーロス派の人々が彼に論争を挑み，ディオニュシオス一家の外に若干の聴衆が彼に従い信じたとのことを告げているのみで，コリントにおけるように，信徒の団体が生れ教会の設立されることを望み得なかったらしい。しかしわれわれに取って興味ある事実は，キリスト教がここで始めてギリシア固有の精神と触れたのみでなく，ギリシア的態度を排撃しつつもその哲学的思惟を摂取して，一種の論理を樹立しようとする企図の始まったことであり，そこから最初のキリスト教的弁証論が出発したのを知り得ることである。使徒行伝の記述は極めて簡単でわれわれの問に応ずるものではないが，そこには後代に成立したアポロギア文学の萌芽を認めることができなくはないのである。

この最初の弁証論としてのパウロの演説は，この事件を記述した使徒行伝の，アテネにおけるパウロに関する記事全体から切り離して之を理解することはできない。記事全体の示している状況を内容的にも関わりある背景として読むときに，彼の演説をよりよくまたより深く理解することができる。之については使徒行伝註解書，殊にヘンヒェン（Ernst Haenchen, Die Apostelgeschichte, 1956）の解説，特に SS. 469—474 を参照されたい。ここでは私はその記述に関する研究には之以上触れないで，次の問題に移ろう。

Ⅲ

キリスト教弁証文学はかように異教的世界への宣教に伴って始まったとしても，単に宣教のための説教の方法として現われた様式であるに留まらず，思想内容の闡明のための手段としての意義が自覚されるに従ってその

固有の特質を発揮するに至る。それはキリスト教が他者と対立し，明確な意義をもって異教的な哲学宗教その他の文化的思想的勢力と対決するに至って，その目的を達成するのが常である。言い換えれば弁証論的態度が論争的な(polemisch)方法に訴えるに至って，キリスト教それ自身の立場をより明確に反省し自覚するのである。初代教会においてこの種のポレミーク――その傾向は既にパウロにも見られたとしても――が具体的な活動形式を取るようになったのは第二世紀半ば以後で，ユスティノス（Justinos）が最初の代表的弁証論者であり　同世紀から次世紀にかけてのアレクサンドリア神学者，クレメンス及びオリゲネスにおいて最も輝かしい思想的展開を遂げ，その後多くの卓れた神学者の著作の中にこの種の文学様式の成果を残し，第五世紀のアウグスティーヌスに至っている。

われわれは今ここに之等の弁証家乃至弁証文学の長い列を辿ることはできない。その中には文学としても優れた作品や，歴史的に注意される人物や，また古典として愛読されるに適わしい著述もなくはないが，それ等は特に研究に値いするしまた研究されなければならない意義を有っている。私はその中から比較的に小さいしかし代表的な一作品を取り挙げて初期弁証文学の一例を示すに留めたいと思う。

それは紀元第二世紀半ば近くに著わされたと推定されるアリスティデース（Aristeides）[3]の残した『アポロギア』（Apologia）である。この人物についてはエウセビオスの『教会史』第4巻3章に簡略な記述がある。それによると彼はクッドラートスに続いて，皇帝アントニウス・ピウスに対し *Περὶ θεοσεβείας* と題する書を献じたが，その書はエウセビオスの時代にもなお残存して多くの人々に読まれていたという。それ以上にはこの著者の経歴も活動の状況も知るすべがなかったが，それのみでなくその書自身も何時の頃からか失われてその事情も内容も全くわからなくなって了っていた。

然るに第19世紀後半になり学術の発達と古典の探求が次第に果を結びつ

つあった頃，本書についても漸次探求の手がかりができて希望が輝いて来た。まず1878年にはヴェネチアにて本書のアルメニア語訳の断片が発見され，続いて1889年には英国の有名な考古学者レンデル・ハリス（J. Rendel Harris）がシナイ山の聖カタリナ修道院にて偶然に本書のシリア語古写本を発見し，久しく知られずにいた本書の概要を推知することができるようになった。更にまた全く思いがけないことではあったが，之も有名な学者ロビンソン（J. Armitage Robinson）が中世時代の修道院文学を研究している間に，古くからダマスコのヨハネによって伝えられていた修道士物語“Barlaam and Joasaph”の第26，7章に，この書が可成り取捨されてはいるが，ギリシア語原文のまま利用されているのを探知して驚き，研究の結果本書のギリシア語本文を再現することに成功した。更にその後ギリシア語パピルス断片二葉が発見され，之によって少くとも三カ所（第5章4，第6章1，2，及び第15章6乃至第6章1）の原形が確かめられ，その報告が大英博物館から公けにされた。かくして本書は殆ど全体に亘ってギリシア語本文を回復することができ，——シリア語古写本との間に疑点があるとのことであるが——キリスト教初代文学史上の重要な発見として知られるようになった。

このような僥倖ともいうべき不思議な発見の連続によってわれわれは長い間知られなかった典型的な弁証文学を取り戻すことに成功したのであるが，われわれに取って重要なまた知り得られることはその内容についてである。本書は僅かに17章より成る小篇に過ぎないが，キリスト教弁証の方法及び構造，思想傾向と論述の態度，共に明晰にして目的に適い，他の同時代の弁証文学と比較しても模範的であり，之によってわれわれは初期の弁証文学の性格を代表的に知ることができる。

まず本書の内容を分解すると，第1章は神の自然的認識について論述し，世界万有の認識によって神に達するとしても之によって理解される神の概念の何であるかを明かにし，全篇の根本思想を説く序章である。それ

はキリスト教的世界観を論証するための原理をなすが，そこにストア哲学の思想が前提されていることは疑いない。第2章以下本文に入り，諸民族の宗教を論じているが，著者によると全人類は4種の族に別たれる。著者はここにその中の三種族，すなわちバルバロイ（Barbaroi），ギリシア人，及びユダヤ人の起源を説明した後にキリスト信徒がイエス・キリストに由来するとして，之等の人々の宗教を論難することを当面の目的とする。まずバルバロイについては，第3章乃至第7章に亘って彼等は四元素を拝祀するが（第4章），地も水も火も空気も神的ではなく（第5章），むしろ神の創りたもうた業で，日や月や星も之と異らないとなし（第6章），更に人間を神として認めることの不当な所以を論究し，却って人間は神性を有せず，喜びを求めて悲みに襲われ，笑いを喜びつつ涙に暮れるのみでなく，怒り激し嫉妬し過失に陥ることを指摘し，この迷信に捉われる彼等の過誤を責める（第7章）。次にギリシア人の宗教に関しては，第8章以下第13章までに彼等の拝祀する神々について，詳かに，更にエジプト人の信仰にも論及している(第12章)。第8章にはギリシア人が神々を人間的に思惟して男女性を区別した結果，その間に種々の不道徳または不幸な関係を生じ，更に相互に冗語することもあり，之が人間の社会に不幸をもたらすことがあることなどを指摘する。第9章以下神話によって個々の神々の悪徳欠陥を難責する。クロノス，ゼウス，ヘファイストス，ヘルメス，アスクレピオス，アレス，ディオニュソス，ヘラクレス，アポロン，アルテミス，アフロディテ，アドニス，レア等。第12章には古人が聖者と称したエジプト人も決して賢明ではなく，当時広く流布していたイシス及びオシリス神崇拝の如き，また動物崇拝さえも行われていることを批難している。第13章には再びギリシア人に戻ってその偶像崇拝を排撃し，詩人や哲学者の矛盾を嘲けり，彼等の法典の規定と一致しないことを責めている。第14章はユダヤ人について，彼等が真実な神観を有するにかかわらずその宗教行事の正しくないことを簡略に論じている。

最後に第15章乃至17章に至って第四種の族としてのキリスト信徒に移る。著者によると，キリスト信徒のみが真理を認識し，創造者としての神を信じ，その戒めを守り，聖書の教を学び，キリストに服従する。神は之に恵みを与え，彼等は永遠の生命にあずかり，「新しい民族」となり，「その中には神的な交わり（göttliche Mischung）がある」（第16章４）。ギリシア人は自己の悪徳をキリスト信徒に帰するが，信徒は之を憎むことなく却って敵の悔悟して救われるようにと祈る（第17章２－５）。著者は最後にキリスト教を誹謗する者に対して，真理を尊重し，キリスト教を受け容れ，来らんとする終末審判を免かるべきことを勧め，之をもって巻を閉じている（第17章６）。

以上が本書の内容であるが，全体の構造から見てキリスト教のための弁証論の部は，他種族の宗教についての叙述に比してやや平板且つ簡略に過ぎたかの感がなくはない。しかし恐らく他宗教へのポレミークに重点を置いたためであり，異教的社会に訴える書として之を必要としたのでもあろう。キリスト教についての解説としては充全だとは言えないが，第２章に４種族の起源を説いた際，特にキリスト信徒がイエス・キリストに由来することを述べ，キリストの生涯とその業とを要約し，使徒たちによって全世界に拡布したことを語って，この教を信ずる者がキリスト者と呼ばれるとなしている説明は極めて要を得たものと言うべく，或いは当時の教会において既に行われていた信仰告白文を適用したのではないかとも察せられる。

ユダヤ人に関する批評は極めて簡略であるが，本書が異教徒に対する弁証であるときにこれは当然のことであろう。之と共にバルバロイ及びギリシア人について本書の重点が置かれているのも妥当らしく思われる。ただここで前者については４元素と天体との信仰を挙げ，後者については神話的宗教を論ずるに留まっているのは何の理由に因るか明かでない。恐らく著者のもち合せた資料に因るのではないかと推測される。何れにしても

著者は当時の密儀祭宗教にも触れず，俗間の迷信やまた皇帝崇拝その他の国家的祭儀にも関わっていないのは，之等に対する関心の乏しかったことを物語るものであり，同時に当時としては幾分教養ある社会の思想傾向を示す，古典的な宗教情操の世界を問題としていたのではないかと思われる。全体の思想的背景として，ストア哲学的乃至ペリパテティコス学派的雰囲気を感ぜしめられるあたりに，当時のヘレニズム期における通俗哲学との思想的な繋がりを認められるのも，その傾向を暗示するものと考えられる。殊に本書第１章に神の自然的認識を説き，被造物がすべて神の力に帰せられ，その中に神的摂理と生命との認められることを述べているときに，ストア的な神的ロゴスの思想の前提されていることは恐らく否定し難いところであろう。もちろんこの種の自然的認識の思想はパウロその他の新約文書中にも認められ，著者がそこから出発したことも考えられ得るが，当時の教養世界に流布した通俗哲学にはストア的乃至アカデミア学派的，更にキュニコス学派，ペリパテトス学派，ピュタゴラス学派，エピキュロス学派等の影響が折衷的綜合的に摂取されていたであろうし，之を分析してその中のある特定の立場に帰するのは却って適切妥当を欠く恐れがある。何れにしてもこの種の折衷的な通俗哲学的思想が本書の背景に存したことは疑いなく，ここに本書と，従ってまた当時のキリスト教的教養社会との思想的傾向を察知することができるであろう。

最後にアリステイデースがわれわれに与える興味ある問題は，彼の書の弁証論的文学様式の意義である。再説するまでもなく彼の『アポロギア』の構造は，第１章の序説に観点の立場を提示し，第２章以下第14章にバルバロイ，ギリシア人，ユダヤ人の宗教を論じてその誤謬欠陥もしくは失敗を示し，終りに第15章乃至第17章にキリスト教的態度を説述している。この形式は極めて示唆的である。新約聖書に既に，ユダヤ人と異邦人とに対してキリスト教信徒を区別しキリスト教的信仰の特異性を強調しようとする態度が著しくあり，之が新約時代のキリスト者における救いの確実性の

信仰に根ざしていたことは疑いないが，そこから出発して初代弁証論者の特徴的思想の一つとして認められる「第三民族」(τὸ τριτὸς γένος genus tritus) の観念を生じたことはハルナックの有名な研究[4]によってよく知られている。しかしアリステイデースにおいては異邦人が更に区分されて，バルバロイとギリシア人とがそれぞれ詳論され，しかもエジプト人についても特説されている。そこにヘロドトス以来ギリシアの学界に伝えられた民族誌的探究の精神的伝統が暗黙の間に前提されていたのではないだろうか。何れにしてもこの学的関心はヘレニズム期以後に発展した Chronicon の研究の根源をなし，之が更に歴史学の重要な動機を形作ったことは確かであり，キリスト教的学術の発達史においてもユリウス・アフリカーヌスからエウセビオスの『年代誌』及び『教会史』を経て，アウグスティーヌスに至る線を辿ることができる。進んで之とギリシア・ローマ学術史の発達との関係にまで論及することも可能であるかどうかは更に大きな問題をなすであろう。とに角このキリスト教歴史学のモティーフが弁証論文学に淵源することを学び得ることはわれわれに取っても極めて興味ある問題であり，そしてその典型的な形態をアリステイデースに見出し得るところにその代表的意義が認められる。

キリスト教弁証論者の代表的人物としては一般にユスティノスを始めとし，アテナゴラス，ミヌキウス，フェリクス等の外にクレメンス，オリゲネス，テリトゥリアヌス等のある作品を挙げ，更にアウグスティーヌスの『神国論』のような大著に昂揚された思想態度を見ることができることに，異議を挟む者はないであろう。今はその根源を探り，初期における典型的作品について概説するに留める。

註

(1) 新約時代の弁証論に関しては Religion in Geschichte und Gegenwart, 3. A. Bd. I, 1957 に E. Kamlah の筆に成る簡潔な叙述があり，最近の文献も挙げてある。同じく初期教会時代については C. Andresen が示唆に富み極

めて有益な概観を論述している。殊に弁証論文学の思想史的精神史的更に教義史的意義の解明は卓れている。なお初代弁証論文学全般については拙著『中世キリスト教研究』参照。

(2) 使徒行伝第17章パウロの説教の様式史的研究については， M. Dibelius, Aufsätze zur Apostelgeschichte, 1953. 特にその中 "Die Reden der Apg. u. die antike Geschichtsschreibung" 及び "Paulus auf dem Areopag." 参照。

(3) アリステイデースについては，原文は正確なギリシア語原本の回復が多くの学者により試みられたが，極めて困難である。ハリス及びロビンソンの本文はシリア語及びギリシア語古写本を対照している。E. J. Goodspeed, Die ältesten Apologeten, 1914.

近代語では K. Julius の独訳 (Frühchristliche Apologeten, in BKV, 2. A, Bd. 12, 1913)

Joh. Geffcken, Zwei griechische Apologeten, 1907 に詳細な語学的文献学的の注解がある。

R. Seeberg, Die Apologie des Aristides, 1893 及び J. Lortz, Das Christentum als Monotheismus in den Apologien des 2. Jhts. 1922 の外に，初代教会史，教義史等参照。

(4) A. v. Harnack, Die Mission und Ausbreitung des Christentums im ersten drei Jahrhunderten. 4. Aufl. 1924. Bd. I.